Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-10

偶然の論理と直観 ： ライプニッツと九鬼周造の交差と分岐

松田, 毅

(Citation)
愛知 ： φιλοσοφια,34:1-16

(Issue Date)
2025-07

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100496724

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100496724

偶然の論理と直観

――ライプニッツと九鬼周造の交差と分岐 (1)

松田 毅

I. はじめに

九鬼周造は近代日本の最も独創的な哲学者の一人である。『いきの構造』（初版 1930 年、英訳 1997 年）は海外の研究者にもよく知られている (2)。ハイデガーは回想で、ベルグソンは手紙で、比較の観点からの「西洋と東洋」の文化・哲学的伝統に関する九鬼の優れた洞察を賞賛した (3)。九鬼は、第二次世界大戦前にいち早くベルクソンの「純粋持続」の生命哲学とハイデガーの解釈学的存在論を精力的、批判的に紹介し、ポンティニー講演、“La notion du temps et la reprise sur le temps en orient”は、東洋の伝統を背景にした、永遠回帰ないし無窮の輪廻転生の可能性を論じた、挑戦的な時間論として注目される (4)。 九鬼が『存在と時間』を論じる際、導入した「実存」の造語が定着していることもその影響力の大きさを示している。しかし、他方で九鬼は、講義録が証明するように、ライプニッツを含む西洋近世哲学史の優れた歴史家でもあった。

では偶然性に関する九鬼のライプニッツ解釈はどうか。講義や論文で『形而上学叙説』と『弁神論』も論じ、1932 年に学位論文として提出し、大幅に書き加え 1935 年に出版した『偶然性の問題』の著者でもある以上、回帰的時間の議論では、ライプニッツの不可識別者同一の原理を拒絶したとしても、偶然に関する、九鬼のライプニッツ形而上学との対決は、ハイデガーやベルグソンに関する考察と少なくとも同程度には重要である点に注目してもよいのではないだろうか。この視座から、九鬼が十全には吟味しなかった論点として「この世界があらゆる可能世界のなかで最善である」と評価する、ライプニッツの偶然の形而上学の様相論理と直観そして自然神学の重層する位相を論じる。九鬼自身は、『偶然性の問題』第 3 章第 2 節と第 3 節で、スピノザと対比して、ライプニッツの偶然の様相論理と形而上学の特徴を、必然、可能、不可能、偶然の論理的関係に関する、二つの四辺形により浮き彫りにしたが、ライプニ

ッツの弁神論への九鬼の批判を逆手に取って、実存の偶然性に関する、ライプニッツ哲学に特徴的な直観的位相が、様相の論理・存在論と自然神学に基礎をもつことを、照射できるからである。もちろん、偶然性は私たちが個体的に有ることの現象学的記述をもつ。つまり、その記述は、私たちの、この世界での、唯一一度きりの人生の遭遇する運命に関する、実存的に企投された解釈の側面も持つことはライプニッツの場合にも妥当する。

前半では準備的考察として、ライプニッツの様相概念に関連する、論理学の二つの体系、つまり二種類の伝統的様相四辺形に着目する。そのことで、九鬼の様相の動的理解、第三の体系の基礎も解明されるだろう(5)。この作業を通して、『偶然性の問題』のもう一つの柱である、定言的、仮説的、離接的、それぞれの偶然の三肢的構造を踏まえ、離接的偶然の形而上学の論点を限定する（II）。

後半ではライプニッツと九鬼、両者に共通する、様相の形式論理的基盤と存在論的理解の道具立てにもかかわらず、九鬼の「無」、ライプニッツの「存在」の立場の違いおよび実存の偶然性の現象に呼応して主題化される感情、つまり、前者の「驚愕」、後者の「平静」とを対比し、キリスト教を地盤とする西洋哲学の主流から見れば、正統的とも言える、世界の「究極根拠としての神」と個の偶然的存在に関する神学的思弁から九鬼が距離を取る結果が、そのライプニッツ解釈に与える影響を述べる。その際、二つの問題を論じる。一つは、実存の理解に関連する、ライプニッツの弁神論の直観的位相の訴求力の解明であり、もう一つは、逆に、偶然の存在現象に関する、九鬼の鋭利な、形式論理的かつ構造的に組織化された思弁にも残されている、ライプニッツ解釈上の限界画定である（III）。

II. 様相四辺形における偶然

九鬼は、ライフワークの『偶然性の問題』の出版前後にも、西洋近世哲学史の講義や遺稿「偶然化の論理」、「驚きの情と偶然性」（1939年）などで繰り返し偶然性の問題を論じた。「偶然化の論理」は、1936年以降に書かれたと思われるが、「偶然化」とは、所与の現実を偶然性に様相化する方法的遂行のことである。思索の反復とその深化はライプニッツの様相論の比重が増す過程と平行するように見える(6)。実際、博士論文以前の九鬼は、人生の「必然主義」の相により傾注しており、その把握は、『偶

然性の問題』では必然を基盤にした様相四辺形として、スピノザの『エチカ』の様相理解を表現した、九鬼の体系1で概念化されるようなものであった。これに対応して、人生の運命的性格を強調していた。しかし、『偶然性の問題』以降、九鬼が、可能を基盤にしたライプニッツ的な様相四辺形に重心を移動させたことに注目しなくてはならない。それは九鬼の体系2に当たる[(7)]。

九鬼は真理論的（alethic）な様相の形式論理的な同値とこれに基づく還元の二つの基本的解釈を与えている。スピノザ的体系1は、ある命題pの必然性□が様相四辺形の基盤となる。この場合、可能性は、◇p≡¬□¬p（「pでないことは必然的でない」）に基づき、書き換えられるが、ライプニッツ的体系2では、命題pの可能性◇が様相四辺形の基盤となる。この場合、必然性は、□p≡¬◇¬p（「pでないことは可能でない」）に基づき、置換される。この体系の順序について九鬼は特には説明していないが、それは、かれの思索の必然性から偶然性への重心移動に対応すると見なせる。一般に、可能世界意味論を土台に展開される、現代の様相論理学では偶然性の問題への関心は薄いが[(8)]、スピノザ的体系の¬□p（「pであることは必然でない」）とライプニッツ的体系の◇¬p（「pでないことは可能である」）の偶然性の定式化の異なる含意に焦点を当てることが重要である。

二つの様相四辺形は、伝統論理学の妥当な直接推理の形式として、定言命題の量と質で、分類される、全称肯定（A）、全称否定（E）、特称肯定（I）、特称否定（O）の各二命題間に成り立つ、矛盾対当、反対対当、小反対対当、大小対当の関係が、それぞれスピノザ的体系の必然、偶然、可能、不可能のあいだに、また、ライプニッツ的体系の必然、不可能、可能、偶然のあいだにも成立するという把握を図示する。矛盾対当の場合、一方が真なら、他方は偽、一方が偽なら他方は真であり、反対対当の場合は、共には真ではありえないが、共に偽でありうる。小反対対当では、共に偽ではありえないが、共に真でありうる。大小対当では、全称命題が真なら特称命題も真、特称命題が偽なら全称命題も偽である（本文末図1参照）。九鬼もこの形式論理的関係を踏襲している。

したがって、スピノザ的体系では、必然性□pと偶然性¬□pは、反対対当の関係として、双方が偽でありうるとしても、双方が同時に真であることはできない。つまり、両立しない。他方、ライプニッツ的体系では、可能性◇pと偶然性◇¬pとは、小反対

対当の関係として、共に偽ではありえないが、共に真でありうる。つまり、両立しうる（図2参照）。可能と偶然の両立可能性は、「偶然的可能性」を容認する、ライプニッツの弁神論の場合、特に重要なものであることは、スピノザ的体系では、可能性¬□¬pと偶然性¬□pも、矛盾対当関係として、両立しないので、論理的に「偶然的可能性」が除外されていることからも理解できるだろう。ライプニッツの場合、主語「カエサル」とその述語「ルビコンを渡る」の例のように、同一世界の同じ時と場所では、もちろん、pか¬pかのいずれかになるので、異なる可能世界の想定が前提となるが、偶然性は◇p&◇¬pと定式化すべきことに注意したい。

また、スピノザの場合、認識論的考察を加え、単に論理的な可能性は、その観念に矛盾が隠されていることを曝露されるか、「自己原因」のような絶対的観点からの観念分析により、それが、実は、現実の真の原因に関する人間の無知の影響の産物であることが明らかにされるか、そのいずれかによって、最終的には、人間の想像力が引き起こす「幻想」として消去されるのであった。スピノザ自身は、はっきりとしたかたちで様相論理学的考察をしていないが、スピノザ的体系では、様相の二重否定に関しても¬¬□pならば、トリビアルに□p[9]であり、逆に□pならば、¬¬□pである。

いずれにせよ、スピノザ形而上学に偶然が入り込む余地のないことに異論はないだろう。偶然を表象することは、受動感情――『エチカ』はその原因を解明し、隷属を免れ、自由に生きる処方を述べるが――の原因である「自然」を十全に認識できない、人間の力の限界の結果の一つにほかならない。いずれにせよ、スピノザの存在論では、偶然と可能は排除され、必然□pか不可能□¬pが残る。したがって、自身のうちになんの矛盾も含まない「自己原因」または「能産的自然」の「永遠の相」から概念把握すれば、存在するものの一切は必然的となる。しかし、この帰結は、九鬼にもライプニッツにも受け入れがたいものであった。

以上の様相概念は、当然ながら、伝統に深く根ざしているので、ここでは、ライプニッツに起源があるとされる、可能世界意味論のモデル論的様相概念とは着想の異なる[10]「概念分析Analysis Terminorum」が前提とする、主語概念の「諸部分概念の無矛盾としての可能性」と、アリストテレスの『分析論前書』（29b29-32a17）以来の「別様ではありえないものとしての必然性」、双方の役割を明確にしておく必要がある。前者は命題を分析し、主語の部分概念と述語の部分概念のあいだに「同一性」[11]が

成立することを示す、還元操作と表裏一体の関係にある。この場合、「円い四角」のように、主語概念に「同時に」Aと¬Aが内含されることが示されれば、命題「四角は円い」は不可能、つまり偽である。この着想は、述語概念の主語概念への論理的内含の理論に基づき、自然神学に拡張され、聖書のペテロに述語「イエスを否認する」が帰属するか否か、も決定できる、神の知が有する個体の「完足概念」の問題系として提示された。講義で『形而上学叙説』を論じた九鬼も、ライプニッツのこの企図はよく知っていたに違いない。

後者、必然については、ライプニッツ的体系では、可能を基盤にし、¬◇¬p、つまり「pでないことは可能でない」と言う形で、「別様ではありえないこと」を、基本的には「pでないこと」が不可能、つまり矛盾を含むこととして把握することになる。しかし、ここでも、それは、現実の世界と似ているが、異なる可能世界を考慮する、ライプニッツ的体系が、それを「虚構」とするスピノザ的体系と違い、現実に「pでない」ことは、それが必然的に「pでない」ことを含意しない。この違いについても、積極的に偶然を認める、九鬼はそのような反事実的可能世界を考慮する立場であった。

一般に流布した印象からすれば、意外に思われるかもしれないが、九鬼は、様相論理学に関する「多元主義」を提案するだけでなく、偶然性を表わす独自の記法を工夫し、それに基づいて、様相に関するかれ自身の理解を説明している。偶然性を公理の基礎に置く体系も、それぞれ、可能性に基づくトレンデレンブルク、不可能性に基づくC.I. ルイス、必然性に基づくオスカー・ベッカー、という、クリプキやヒンティカ以前の、九鬼の同時代の様相論理学の概観を与えるなかで提案される(12)。その記法 ⨀ は、独立した出来事の二系列の遭遇を象徴する(13)。

しかし、九鬼は、自身の著作の体系的な完成に不可欠の概観を経て、二種類の大小対当の関係を様相間の量的関係として解釈する、かれ自身の本質的に動的な様相理解を提示する。それは、極大から極小へのあるいはその逆の移行であり、それらは、一方の必然と可能、他方の不可能と偶然のあいだで正反対のベクトルを持つことができる(14)。つまり、それらの動的関係は、必然から可能への、不可能から偶然への、そしてそれぞれの逆、様相の一方の端から他方の端への極限移行と見なされる。この意味で、九鬼の「偶然化」、すなわち所与の現実を偶然の存在様相へと変様させる操作は、この世界のうちに存在する、私たちの思考が、反事実的様相を含む、他の可能世

界に移行する不可欠の契機なのである。実際、九鬼は、原始偶然に関しては対立する選択をするものの、無限の数の可能世界という、ライプニッツの着想を賞賛する(15)。

次の論点は、定言的、仮説的、離接的、それぞれの偶然という、三肢的に分節化された、様相の論理構造である（表参照）。この構造は、判断と推論に関する、伝統の三分類に従い組織されており、『偶然性の問題』の章分けも、カントの『純粋理性批判』の超越論的弁証論と同様に、これに対応すると言ってよい。九鬼は、洋の東西を問わない、思想史の該博な知識を披瀝し、これら三種類の必然と偶然のペアの特徴を活写している。簡潔に述べると、定言的必然と定言的偶然は、普遍、つまり全称判断によって論理的に決定される。存在論的には、四つ葉のクローバーの「四つ葉」は、植物種「白詰草」の例外的形質と見なされるように、基体・属性の関係である。この種の花は希なので、見つけた人に幸運をもたらすと考えられたのである。

仮説上の必然と偶然は、文字通り、根拠と帰結の論理的関係から考えられる、仮説的判断や推論に対応するが、根拠は、典型的には、作用的ないし機械的原因および目的原因である。したがって、この種の判断や推論は、人間の知識の非常に幅広い分野を覆う。九鬼は、ライプニッツに従って、偶然とハザードも区別する。偶然は、自由と因果的偶然としての自発性との関連で理解されるべきであるが、ハザードは、合理的に理解可能な目的なしに、生起するので、私たちにはかなり強制的に感じられるものである。九鬼の例を二つ挙げる。一つは人々の予期せぬ幸福な出会いであり、他は、量子力学によって検出される、ミクロレベルの粒子の運動の「不確定性」である。前者は、意図や目的なしに生じるが、私たちが人生で遭遇する、肯定的に評価できる偶然である。そして後者は、機械論的世界像と対照的な「消極的な」因果的偶然である。注意が必要なのは、九鬼が、たとえば、クールノーを参照することによって、特に自然科学上の仮説的偶然の現象に関する客観主義に立つことである。偶然は「私たちの無知」の結果であり、形而上学によって最終的に解消できる、と考えるスピノザ主義を、ライプニッツと同様に、拒否するのである。

最後に、九鬼は、部分全体関係から離接的（選言的）必然と偶然を論理的に特徴づけ、存在論的には要素間の交互作用に着目する。たとえば、自然現象や行為、さらには歴史上の人物の存在も、様々な可能性があるなかで、たまたま現実化すると考える。この偶然性は、もちろん、ライプニッツ形而上学の「根拠律」またはより限定的に使

用される「充足根拠律」の問題領域に属する。しかし、この原理は、「東洋」でも、人間にとって切実な、究極の問いの答えを求める、願望を表明している。九鬼が触れた、古代インドの対話『ミリンダ王の問い』でも「なぜ何もないのではなく、何かがあるのか、なぜ別の仕方でではなく、こうあるのか」が問われていたからである(16)。

九鬼は、『偶然性の問題』第3章で、二種類の様相論理の四辺形の実存哲学的問題を追究し、従前の考察を下敷きに、最終的に、離接的偶然の局面で、私たちの所与の現実を存在論的に限定して、現実化されなかった、反事実的な出来事や私たちの実存の非存在の可能性を積極的に見ようとする。それは、一方の必然と可能、他方の不可能と偶然のあいだにある様相四辺形の二つの大小対当関係の動的解釈によるものである。ここで重要なのは、スピノザ的体系とは対照的に、ライプニッツ的体系では偶然と可能とが両立する点の再確認である。偶然的可能性が、ライプニッツ的体系では、何の矛盾もなく確かにあること、したがって、世界内に存在する私たちの偶然的現実は、動的ないし歴史的に、他にもありえた無限の数の可能性の一つとして解釈できることである。第三の体系に従えば、スピノザの場合、可能が必然の極限となる一方、偶然は「永遠の相」のもと不可能の極限に変換されて思弁が終わるが、ライプニッツの弁神論では、四つの様相は、さらに人間と神に共通する倫理規範、特に「義務」の観点からの限定を受けることになる(17)。

III. 実存の論理と直観　ライプニッツと九鬼の交錯と分岐

まず九鬼がシェリングの『人間的自由の本質』が語る「無底Ungrund」ないし「原始偶然」からの世界創造の理論を好む一方、世界創造の究極根拠として、神の決定に訴える自然神学から離れる点を確認しておきたい(18)。当然ながら、ライプニッツは「西洋の伝統」に忠実なのだが、両者に共通する、様相論理学的根拠とその道具立てにもかかわらず、離接的偶然の拠り所が、九鬼の場合は無に、ライプニッツの場合は存在にある、差異の帰結を観測する。また、実存の偶然性に呼応する感情については、九鬼では驚きが、ライプニッツでは、現実世界を受容した結果として平静が見いだされる点にも留意しなくてはならない。

九鬼とライプニッツ、両者の思弁を貫く、反事実的な様相論理的手法は、現存在の解釈学の記述的方法にも、生命現象の量的側面を切り取る自然科学の機械論的方法に

とって代わる、質としての生命の持続に関する直観にも見出されない。実際、九鬼は、同時代フランスの科学哲学者、ポアンカレや『確率論』のクールノー、『自然法則の偶然性』のブートルーのような、科学とその方法をより積極的に重視する哲学者も論じた[19]。九鬼は、ともすれば、東洋のヴァナキュラーな言語の伝統に由来する解釈学的存在論と文化的にエキゾチックな生の哲学、二つの相貌から評価されがちであるが、論理学や科学の方法を否定しなかった。他方で、キリスト教神学の枠組みの外で思弁しようとする、九鬼にすれば、シェリングの「無底」も「純粋な偶然性」の立場を表明するにはなお徹底不足であった。そして「驚きの情と偶然性」では、神の創造「以前」の無数の可能世界に関する、ライプニッツの思弁に、存在論的プラトン主義に対して、ニーチェがニヒリズム批判の文脈で提起した、「背後世界論」の亜種を見ているように思われる[20]。

しかし、そうした見方は、プラトン主義の「真の存在としてのイデア」と「イデアの影像としての世界」の図柄と対立する、世界の数的唯一性と可能世界に関するライプニッツの「コンセプチュアリスト」的理解[21]を踏まえれば、誤解を含むものだと言える。確かに、偶然に関するライプニッツの弁神論の戦略も、西洋哲学の伝統内部での試み、言い換えれば、「帰属する」文化的地平内部での解釈の試みの一つにとどまる。とはいえ、答えは正反対だとしても、ライプニッツの弁神論による偶然解釈と東洋的伝統を背景にした九鬼の偶然解釈を全く異質の作業と見なすことはできない。この点を確認したうえで、実存の意味に関わる、ライプニッツの弁神論の直観的訴求力の源泉を示す一方、九鬼の偶然性の哲学が含む、形式論理の強度の限界も指摘したい。そのために、九鬼とベルグソンの関係を論じ、多義的な「直観」の概念を解きほぐす研究論文[22]を手がかりにする。

九鬼によれば、ベルグソンの「純粋持続」の直観は、一種の動物的生命感情であり、共感の瞬間を伴いうることで、言語や科学が使用する数学的記号の、知的だが道具的な機能とは対照的である[23]。これに対して、ボッツ＝ボーンスタインは直観を三類型ないし要素に分類する。イデア直観、美しいものの知覚、アウグスティヌスに代表される、神的または超越的な感情である。人間にはイデアの直観はできないと考えた、ライプニッツにも他の二要素を見つけることはできる。

ここで神の有する「ビジョンの知識」の役割が問題となる。それは、『弁神論』末

尾の挿話で、セクストゥスに関する、供犠者、テオドロスの神秘的直観を語る根拠の一つとなる。もう一つの根拠は、神の知と人間の知の類比にあるが、直観こそが、実存の偶然性をあらゆる可能性のなかで最善のものとして受容しうる、認識様態なのである。ビジョンの知識は、後期スコラ哲学に登場した、「摂理providentia」が含む神の「中間知」の想定や九鬼の言う「偶然化」のライプニッツ的形態であるが、『弁神論』は、ビジョンの知識に対して、事象の系列の直観として、歴史上の人物に関する偶然真理に十分な根拠を与える役割を与える。

しかし、人間の場合、この直観は、偶然真理に関して、概念分析が開示する、主語と述語の潜在的同一性（の直観）と、無限級数で生じうる、数列のある極限への収束（の解析的規則性ないし双曲線の座標軸への漸近のような進行の直観）とのあいだに構造的類比を認めることができなければ、説得力をもたないだろう。同一性への「還元による証明」の構想は、たとえば、ペテロの完足概念の論理にも妥当しなくてはならないが、『形而上学叙説』でも仄めかされただけであり、未聞に終わった『概念と真理の解析に関する一般的探究』の説明は、論理学者のアルノーにも同意のできないものだったに違いない。とはいえ、その135節と関連する偶然真理の証明に関するメモは、「中間知」の理論が言う意味の神の「ビジョンの知識」を指示し、その認識様態を必然真理の、有限回の解析で終わる、概念分析的還元による証明と対比している(24)。『弁神論』も、神による偶然真理の「反省的認識」(25)を、世界創造に先立ち、可能世界の、過去、現在、未来に及ぶ、事象系列全体を見通すこととして位置づける。『弁神論』の挿話は、直観を、夢で或る人生に可能な無数の舞台劇を見ることとして語るしかないとはいえ、神のビジョンを人間の直観の次元に移し置いたものと言える。

ハイデガーが、実存理解との関連で「存在忘却」に触れ、主語述語論理と実体属性の存在論が西洋哲学に深刻な影響を及ぼした、と繰り返し強調した以上、アリストテレス的伝統の論理学および存在論の系譜とハイデガーによるその「破壊」の計画を知悉するはずの九鬼ならば、ライプニッツの偶然真理の論理学と類比の認識論および自然神学上の基礎と問題点を他に先駆けて検討できたかもしれない(26)。西洋哲学に見られる「純粋な偶然性」の無視という、かれの主張は、同じ概念枠組みに依拠するはずだからである。

しかし、二人の哲学者は、ビジョンの知識の神学および同一性の論理と無限級数の

収束との類比に支えられた直観に関心を抱くことはなかった。かれらは、ライプニッツの直観概念が喚起し、内包する問題には踏み込まず、「存在忘却」と「純粋な偶然性」に対応する不安や驚きのような、実存の根本感情の現象を記述し、解釈する方向に進んだ。その限りでは、わたしたちには、ライプニッツの立場、つまり、◇p&◇¬pと表現される、形而上学的偶然に対応する、実存の感情様態を、この偶然を「道徳的必然」として二重の仕方で様相的に規定し、思弁する地点から、深掘りする課題が残されている。九鬼は「驚きの情と偶然性」でデカルトやスピノザに触れたが、ライプニッツには言及さえしなかったからである。

そもそも、ライプニッツにとって直観としてのビジョンの知識の根源は、唯一の現実世界に関する神の知識の「卓越eminentia」にあり、神は世界と歴史のあらゆる細部を十全に知る。Twisseに関するノートは、神の「卓越」を、アクィナスの「力」やスコトゥスの「意志」ではなく、知識に帰属させる(27)。人間がその種の認識を持つことができないことは、『知識、真理、観念に関する省察』のライプニッツが、「明晰判明」という真理の基準に依拠する、哲学者たちとの差異に言及しながら、認めたとおりである(28)。とはいえ、そこでは、人間が、神の傑出した直観の代わりに、論理演算や無限小幾何学の優れた記号と規則により、論理学と算術で、十全ではないが、それに準じる判明な認識を持つことができると、付言された。優れた記号による認識は、「盲目的」だが、曖昧でなく、美しいものの知覚や快苦のような「明晰であるが判明でない」様態と異なる。ハイデガーも九鬼も、ドイツ語や日本語の詩（九鬼の場合、特に伝統の定型詩）に哲学的関心を持つ共通点があったが、ハイデガーにとって論理演算は、否定的な意味で「集立Ge-stell」の典型的様態である一方、九鬼は、偶然の操作子を考案し、形式論理学に則り、思弁した。そうだとすれば、九鬼にはライプニッツの論理と直観（そして神学）の重層的構造を読み解く素地が十分あったのではないか。

この点で『弁神論』末尾にライプニッツがヴァラの自由意志論を、批判しながら、引き継ぐ仕方で創作した、物語は、神のビジョンの知識の類同者として、人間に可能な直観の重層的構造を理解する助けとなる。状況は、神官テオドロスが、女神に導かれ、夢でローマ最後の王、罪人セクストゥス・タルクィニウスに関する無数の可能世界を総覧する設定である。総覧は、想像にとどまるが、反事実的思考法と創造の自然

神学とに裏打ちされている。挿話は、その大罪にもかかわらず、実存するセクストゥスを含む「現実世界が必然かつ最善である」とテオドロスが直観する結果、神の善性と人間の自由意志を擁護する一方、現実を受容する感情の一つとして「平静tranquillité」が生み出されうることも示唆する(29)。

最後に指摘しなくてはならないのは、九鬼が、ブートルーによる様相の倫理的解釈(30)に言及したにもかかわらず、残念ながら、若いライプニッツの義務論理的様相を論じなかった点である。資料の当時の公開状況でも、九鬼は、ライプニッツ的体系について「善人のための自然法」に関するライプニッツの洞察(31)、つまり真理論的様相と義務論理的様相の構造的対応の主張を知りえた、と考えてもよいとすれば、少なくともライプニッツの解釈としては、掘り下げが足りなかった、と言えるのではないか。義務、許可、禁止、無差別の義務論理的様相は、ライプニッツ的体系の必然、可能、不可能、偶然の様相と類比的に考えられており、九鬼が早世しなければ、この論点を取り上げることもできたかもしれない。もちろん、「義務的行為は現実になされる」は、「□pならばp」という真理論的に妥当な推論の一つである一方、義務はしばしば果たされないので、この対応関係は完全ではないのだが(32)。

にもかかわらず、人間と神双方に妥当する「道徳的必然」、つまり道徳上の永遠真理としての義務というライプニッツの思想は、同時代の「恣意」ないし「約束」による規則としての道徳概念と鋭く対立する。この点は、ホッブズのような倫理・法哲学者とだけでなく、「汝」や他者との出会いを強調する実存主義とも対照的である。「永遠の未来」を展望し、最善を実現するための普遍主義の倫理は『弁神論』の形而上学の跳躍台である。この限りで、偶然を目の当たりにして、驚愕の感情を抱くことから始め、ニーチェのように、世界を偶然の「遊戯」(33)として観照する九鬼の態度と、規範に導かれ、形而上学により人間と神の自由も擁護し、平静の境地に至ろうとするライプニッツの使命とは分岐する。さらに想像を逞しくして、この分岐点から望むと、かりに九鬼が「善人のための自然法」に関する義務論理的洞察に遭遇していたとしても、あえてその問題の扉を開くことはせず、変わらず、自分の道を歩んだのではないか、とも考えさせられるのである(34)。

註

(1) 本稿は第 11 回国際ライプニッツ学会の報告（Matsuda.2023b）を踏まえ、二人の哲学者の交差と分岐を追究したものである。様相四辺形の記述をはじめ、内容が重複する箇所があることをお断りする（cf. Matsuda.2023a）。九鬼周造を論じた神戸大学の 2021 年度の哲学演習の受講者にもこの場を借りて感謝したい。

(2) 海外でのこうした評価は、たとえばMaeda の著作からもうかがえる。

(3) Heidegger.85.「回想のベルグソン」（九鬼. V.135ff）

(4) 永遠回帰はライプニッツにとっても重要な問題であった。その可能性を検討したが、最終的にはそれを否定した（Leibniz.1991.72. cf.松田.2021.186）。

(5) 宮野は第三の動的体系が九鬼の様相理解の核であると述べる（宮野.第 2 部第 3 章）が、この体系は他の二つから独立の様相論理としては成立しない。

(6) この変遷はブートルーの哲学における自然法則の偶然性の問題にも妥当する。ブートルーは、九鬼が講義の準備のために使用した『モナドロジー』の注釈書の著者でもあった（九鬼. X.297-329.）。

(7) 九鬼.II.163ff. 松田. 2021.151.

(8) 九鬼の「様相論理」に関して、萱間は、最も強い、様相命題論理 S5 に即して、「九鬼的偶然性の定義」が含む矛盾（萱間.47）と高階の様相の欠如（萱間.55）を指摘するが、本稿で重要な点は、九鬼では曖昧さが残るとされる「非必然性としての偶然性」に、ライプニッツ的体系の場合、可能性と両立しない、不可能性は含まれない点である。

(9) これは帰謬法の普遍的妥当性に関わる。ライプニッツの場合も、確定した値の「実在」に関して議論の余地のある無限小の存在主張に関してその妥当性が制限された（松田.2003.174）。

(10) （Lenzen.51）は、「概念の無矛盾」を示す、概念分析的アプローチを可能世界意味論ないしは「可能的個体」の観点から解釈できる点を論じているが、可能的個体という概念をライプニッツの存在論の枠組みに組み込むことができるかは意見の分かれるところである（松田.2003.94）。

(11) これは「AB は B である」（たとえば、「人間（理性的動物）は理性的である」）と表現される潜在的同一性（松田.2005.186）として示される。

(12) 九鬼.II.65.

(13) 九鬼.II.153ff.

(14) 九鬼.II.176ff.

(15) 九鬼.II.355.

(16) 九鬼.II.39.問いは、直接には容姿の美醜など、私たちの属性、つまり定言的偶然性に関わるものであった。

(17) この限定は、モリナの提唱した「中間知 Scientia media」を含む、神の有する知の二重の様相規定に関わる（Matsuda.2023a）。『弁神論』では、悪の可能性は、神学上、必然的だが、悪の生起は、論理的に偶然であると同時に、仮説的および道徳的必然として把握される（GP VI, 449）。

(18) 九鬼.『西洋近世哲学史稿』（VII.253.）

(19) 九鬼.『現代フランス哲学講義』（VIII.187ff, 290ff）。自然法則の偶然性の把握に関して、九鬼は、現象の流れを、物理学の基底に観察される不確定性として語っている。

(20) 九鬼.III.159-163.シェリングもあくまでキリスト教の影響下にあるとされる。

(21) ライプニッツ解釈を含む、分析的形而上学ないし神学による、様相の論理・存在論的研究でも、可能世界を「事態」ないし抽象的対象として把握するプランティンガの「現実主義」の観点から「神的コンセプチュアリズム」の解釈が与えられている（Propach.151）。

(22) Botz-Bornstein.

(23) 九鬼.VIII.306.

(24) C.2.

(25) 『弁神論』「神の大義」16 節（GP VI, 441）。

(26) 「観念」が、個体や属性、類や種に関する概念だけでなく、事態も指示する点を考慮すれば、フッサールの理論も援用して「事態を見知ること」を「基底づけられた直観」として把握することができる（松田.2021. 特に 287ff）。

(27) Grua.354ff.

(28) GP IV, 423ff.

(29) 『弁神論』の序文で、他の運命論との差別化を図るために、「キリスト者の運命」を語るとき、ライプニッツは、平静が「満足」ではないとしている（GP VI, 31）。女神に導かれて、夢を見、法悦状態となったテオドロスと違い、ユピテルに自分の悪い運命を知らされ、不満を抱きながら、神殿を立ち去った、セクストゥスが平静な心境だったとは考え難い一方で、『モナドロジー』90 節（GP VI, 622）、『24 の命題』（VII, 291）の最後を読む限り、テオドロスの

心境をライプニッツのものと同一視することもできない。事態はこの点に関して（松田. 2021.310）の挿話の要約よりも複雑である点を付言しておきたい。

(30) 九鬼II.298ff.

(31) A VI, 1. 466. Busche. 244.

(32) Hostler.66, 三平.318.

(33) この態度は、直接にはヘラクレイトスの言葉に託されている（九鬼II.206）が、九鬼は別の箇所（III.271）で、エピクロスの快活と並び「ニーチェの明朗に帰れ」と宣言する。

(34) あまりに問題が大きいので、自然神学から距離をとること、つまり、九鬼とライプニッツの分岐そのものの評価を本稿で行うことは断念したい。なお、本稿は科学研究費補助金（17K0216904）の成果の一部である。

文献

ライプニッツの典拠は(G.V.249)のように、通例の略号、巻数の表記を用い、頁数を示した。他は、筆者、（複数の場合は）発行年、頁数で表記した。

A: *Leibniz, G, W.,* 1926ff. *Sämtliche Schriften und Briefe*. Ed. die Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Berlin. Akademie Verlag.

C : *G. W. Leibniz Opscules et fragments inédits*, Extraits des manuscrits de la Bibliothéque royale de Hannover par Louis Couturat. 1966. Hildesheim. Olms.

GP: *Die Philosophischen Schriften von G.W.Leibniz*.Ed.Gerhardt.C.I.,1965. Hildesheim. Olms.

Grua : *Leibniz Texte inèdits d'apres les manuscrits de la Bibliothèque provincial de Hanovre, publiés et annotés par Gaton Grua.* 1948. Paris. Puf.

Botz-Bornstein, Thorsten, "Contingency and the "time of the dream" Kuki Shūzō and French Prewar Philosophy", *Philosophy East and West*, 50.4. 2000, pp. 495-507.

Busche, Hubertus, *G. W. Leibniz. Frühe Schriften zum Naturecht.* Ed&Trans. Hamburg, Felix Meiner, 2003.

Heidegger, Martin, *Unterwegs zur Sprache*, Pfullingen, Neske, 1959.

Hostler, John, *Leibniz's Moral Philosophy*, London, Duckworth, 1975.

萱間暁, 「九鬼周造の偶然論について―様相論理からのアプローチ―」『東洋大学大学院紀要』54 号, 2017 年, pp. 39-60.

九鬼周造全集, 岩波書店, 1981 年（巻号と頁数で表記）

Leibniz, Gottfried, Wilhelm, *De l'horizon de la doctrine humaine* (1693) ; *Apocatastase pantiōn*

(La Restitution universelle) (1715) textes inédits, traduits et annotés par Michel Fichant, Paris, Vrin, 1991.

Lenzen, Wolfgang, *Das System der Leibniz'schen Logik*, Berlin/New York, de Gruyter, 1990.

Maeda, Graham, *Time, Space and Ethics in the Philosophy of Watsuji Testsuro. Kuki Shūzō, and Marin Heidegger*, New York & London, Routledge, 2006.

松田毅,『ライプニッツの認識論―懐疑主義との対決』創文社, 2003年

松田毅,「ライプニッツ　真理と根拠の多様性と統一性―「同一性」の論理と認識のトポス」『真理の探究』村上勝三編, 知泉書館, 2005 年, pp. 179-212.

松田毅,『夢と虹の存在論―身体・時間・現実を生きる』講談社, 2021年

Matsuda, Tsuyoshi, "Duplicated Modalities in Leibnizian Theodicy as an Application of Analogical Thinking." Vorträge des XI. *Internationalen Leibniz-Kongresses.* ed. W. Li. C. Wahl, S. Erdner. E-M. B. C. Schwarze und Y. Dan., Olms, Hildesheim, II pp. 459-469, 2023a.

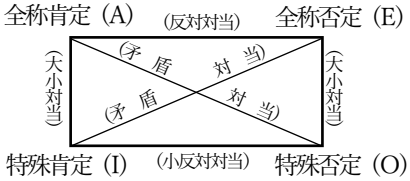
Matsuda, Tsuyoshi, " Contingency in Leibniz's Metaphysics seen from Shūzō Kuki's Confrontation with it." Vorträge des XI. *Internationalen Leibniz-Kongresses,* II pp. 470-479, 2023b.

宮野真生子,『出逢いのあわい―九鬼周造における存在論理学と邂逅の倫理』堀之内出版, 2019 年.

Propach, Jan Levin, *Alles kann, nichts muss?! Theorien der Modalitäten G. W. Leibniz, D. Lewis und A. Plantinga und Ihre Vereinbarkeit mit Spielarten des Theismus,* Münster, Aschendorff, 2020.

三平正明,「現代論理学から見たライプニッツ　概念論理から義務論理まで」『ライプニッツ読本』酒井潔・佐々木能章・長綱啓典編,法政大学出版局, 2012 年, pp. 302-322.

図1 伝統的三段論法の四辺形と直接推理



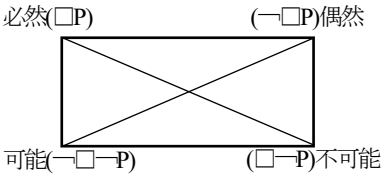
矛盾対当：一方が真なら、他方は偽、一方が偽なら、他方は真。

反対対当：共には真ではありえないが共に偽でありうる。

小反対対当：共に偽ではありえないが、共に真でありうる。

大小対当：全称命題が真なら特称命題も真、特称命題が偽なら全称命題も偽。

図2 様相四辺形：スピノザ的体系



ライプニッツ的体系

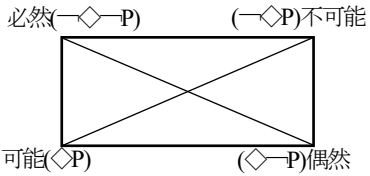


表　九鬼の様相の三肢構造

観点	関係	判断形式	存在	必然	偶然（アリストテレス）
概念性	概念と徴表	普遍的判断	実体と属性	定言的	シュムベベコス（孤立的事実等）
理由性	理由と帰結	仮説的判断	因果性	仮説的	アウトマトン/テュケ（無目的等）
全体性	全体と部分	離接的判断	交互作用	離接的	エンデコメノン（可能性の問題等）

（岡山大学社会文化科学研究科研究員・神戸大学名誉教授）